

# 日本語相談室学生アドバイザーの学びの変容

## Transformation of Student Advisors' Learning in the Japanese Language Support Desk

藤田 恵・金庭久美子・小松満帆・任ジェヒ・小林友美  
数野恵理・鹿目葉子・丸山千歌・池田伸子

FUJITA Megumi, KANENIWA Kumiko, KOMATSU Maho,  
YIM Jaehee, KOBAYASHI Tomomi, KAZUNO Eri, KANOME Yoko,  
MARUYAMA Chika, IKEDA Nobuko

### 〔要旨〕

立教大学日本語教育センター「日本語相談室」は、センター設置以来、日本語教育を専門とする教員が本学の留学生をサポートする場として運営してきた。近年の大学の国際化、留学生数の増加に伴い、2022年度より本学の学部生、大学院生が務める学生アドバイザーが運営メンバーとして加わり、「日本語相談室」は留学生サポートの場に留まらず、日本語を母語とする学生と留学生の両者を多文化共生社会で生き抜くグローバル人材として育成する場となった。本稿では、2022年度の「日本語相談室」拡充の取り組みを整理し、学生アドバイザーが「日本語相談室」の場において、どのような活動を行い、何を学んだのか、その学びの変容を述べる。

**Key word:** 日本語相談室、留学生の日本語サポート、立教型グローバル人材の育成、グローバル・コンピテンス、大学の国際化



藤田 恵、金庭久美子、小松満帆、任ジェヒ、小林友美、数野恵理、鹿目葉子、丸山千歌、池田伸子  
FUJITA Megumi, KANENIWA Kumiko, KOMATSU Maho, YIM Jaehee, KOBAYASHI Tomomi, KAZUNO Eri,  
KANOME Yoko, MARUYAMA Chika, IKEDA Nobuko

## 1. はじめに

近年、大学の国際化、留学生数の増加に伴い、多くの大学において、留学生支援や日本語サポートの取り組みが行われている。例えば、早稲田大学による「わせだ日本語サポート<sup>1)</sup>」(木下他、2017・トンプソン他、2019・寅丸他、2021)、神戸大学による「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ<sup>2)</sup>」(森田、2021)、お茶の水女子大学による「留学生日本語学習支援・交流室<sup>3)</sup>」があり、他にも、昭和女子大学、千葉大学、東京大学、東洋大学、法政大学、山梨学院大学、立命館大学などでも同様のサポートが行われている。

立教大学では、2011年4月に日本語教育センター(以下、CJLE)が設置され、CJLE設置当初から「日本語相談室<sup>4)</sup>」を開室している。「日本語相談室」は、これまで、日本語が母語ではない本学の留学生をサポートする場として、CJLEの教員が対面とオンラインで担当してきた。2022年度より、新たな取り組みとして、教員だけでなく、本学の学部生と大学院生が務める学生アドバイザーもオンラインで「日本語相談室」を担当することになった。学生アドバイザーの参加により、「日本語相談室」は、留学生の日本語サポートのみに留まらず、日本語を母語とする学生と留学生の両者を多文化共生社会で生き抜くグローバル人材として育成する場に生まれ変わった。そこで本稿では、2022年度の「日本語相談室」拡充の取り組みを整理し、学生アドバイザーが多文化共生社会に生きる学生として、「日本語相談室」の場で他者を理解し、活躍できる人材となるための気づきをどのように得ていくのか、その変容を考察することとする。

## 2. 立教型「日本語相談室」

前節で取り上げた各大学の取り組みを比較、検討した結果、主に、日本語教育を専門とする大学院生の能力、文章指導教育を受けた大学院生の能力、さまざまな専門分野の学部生及び大学院生の多様性、日本語教員の専門性に注目した支援システムの構築を通して、種々の支援を行っていることが分かった。その主たる目的は、留学生の日本語能力の向上と、それをサポートできる学生アドバイザーの指導スキルの養成となっている場合が多い。

CJLEでは、前述のとおり、「日本語相談室」を多文化共生社会で生き抜くグローバル人材の育成の場とするために、学生アドバイザーと留学生の両者のグローバル・コンピテンスの習得を視野に入れることとした。具体的には、①これまで教員のみで行ってきた相談活動に日本語を母語とする学生を取り込むこと、②留学生と日本語を母語とする学生がともに多文化共生理解を深める場を創出すること、③多文化共生社会で活躍できるグローバル人材を育てることの3つを柱とし、立教型「日本語相談室」の運営を行う。

### 3. 2022年度学生アドバイザー「日本語相談室」の取り組み

2022年度の「日本語相談室」の学生アドバイザーは、春学期に2名（大学院生1名、学部生1名）、秋学期に2名（学期開始時は、春学期から継続の大学院生1名、新規の学部生1名であったが、学期後半に担当者の交代があり、学部生を新規の大学院生に変更）が担当した。学生アドバイザーの任用にあたっては、日本語教育専攻の学生にこだわらなかった。CJLEセンター長の管理の下、2022年度の「日本語相談室」の運営体制は、相談担当教員（CJLE所属の教育講師）、学生アドバイザー統括担当教員（CJLE所属の特任教員。以下、統括教員）、学生アドバイザーであり、「日本語相談室」に来室する留学生を含め、全員が協働して相談活動に取り組んだ。

立教型「日本語相談室」の実現のためには、学生アドバイザーと留学生の関係を、指導する者と教えられる者とするのではなく、両者が共に考える者となる必要がある。そのためにもまず取り組んだのは、学生アドバイザーに対して、「日本語相談室」が自身のグローバル・コンピテンスを習得する場であるという理解を深めることである。そこで、学生アドバイザーの1学期を「①事前研修」、「②準備期間」、「③活動」、「④事後研修」の4期に分け、それぞれの目的に合わせて活動を行うこととした。次節から、「①事前研修」から「④事後研修」までの各活動に焦点をあて、述べていくこととする。

#### 3.1 事前研修

「①事前研修」では、学生アドバイザーが、立教型グローバル人材に期待されることと、「日本語相談室」の理念や活動内容の理解を深めることを目的とした活動を行った。

##### 3.1.1 立教型グローバル人材に期待されること

一番初めに行ったのは、学生アドバイザーが立教型グローバル人材に期待されることについて考えることであり、統括教員作成の事前研修資料（図1）を用いて、この活動を行った。

立教型グローバル人材に期待されることの設定には、本学のスーパーグローバル大学構想「Rikkyo Global 24」と、文部科学省グローバル人材育成推進会議の「グローバル人材」の概念などを参考にした。

本学のスーパーグローバル大学構想では、育成する人物像を「専門性に立つグローバル教養人」としており、「『自ら考え、行動し、世界と共に生きる』新しいグローバルリーダーの輩出」を目指している。「専門性に立つグローバル教養人」に必要なスキルとして挙げられているのは、「思考力」、「変革力」、「共感・協働力」である。（立教大学、2014）

文部科学省は、「グローバル人材」の概念として、「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」の中で、「要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力」、「要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、「要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」の3つの要素が含まれているとしている。そして、「グローバル人材」に限らず、

今後の社会の中核を支える人材として必要な資質として、「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等」を挙げている。（文部科学省、2011）

ISAは、経済協力開発機構（OECD）の「生徒の学習到達度調査（PISA）」に2018年より取り入れられた「Global Competence<sup>5)</sup>」の枠組みに合わせた教育プログラム「Global Competence Program<sup>6)</sup>」を教育機関に提供しており、この教育プログラムの構成要素を6つ挙げている。この6つの要素に、本学のスーパーグローバル大学構想と、グローバル人材育成推進会議の「グローバル人材」の概念を組み合わせ、学生アドバイザーが「日本語相談室」の活動において経験や獲得が期待されることを、以下のように設定した。

- (1) コミュニケーションスキル（Communication Skills）：多様な背景を持つ相手に対して、効果的にコミュニケーションを行うことができる能力を身につける。
- (2) マルチリンガルスキル（Multilingual Skills）：多様な言語背景を持つ相手へのコミュニケーション手段として「やさしい日本語」などを身につけ、その役割の理解を深める。
- (3) エモーショナルインテリジェンス（Emotional Intelligence）：「日本語相談室」で複数の留学生と関わることにより、相手への共感、さまざまな場面への適応力を身につけ、同時に自己認識と自己管理を行う。また、これらのことを活動のモチベーションにつなげる。
- (4) シンキングストラテジー（Thinking Strategies）：多文化社会、グローバル社会に存在する自身とは異なる思考方式を知る。
- (5) インターカルチャースキル（Intercultural Skills）：自身とは異なる文化的な価値観を持つ相手が存在することを知り、そのような相手に対して、理解と配慮ができる感性を身につける。そして、自身が不慣れな環境に置かれた場合に生き抜く能力を身につける。
- (6) グローバルアクション（Global Action）：「日本語相談室」において多文化を経験し、その理解を深める場として活用する。

学生アドバイザーには、「日本語相談室」の活動において、これら6つのことが期待されていることを一番初めに伝え、実際に行う活動の概要と1学期の流れ（図2）について説明した上で、立教型グローバル人材となるために、どのようなことを意識すればよいのかを考えさせるようにした。

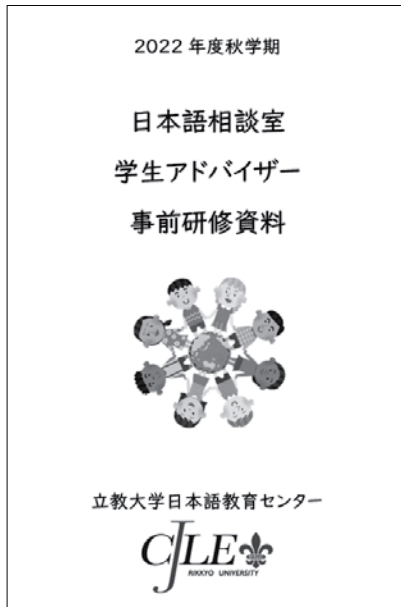


図1 日本語相談室学生アドバイザー 事前研修資料（全10ページ）表紙

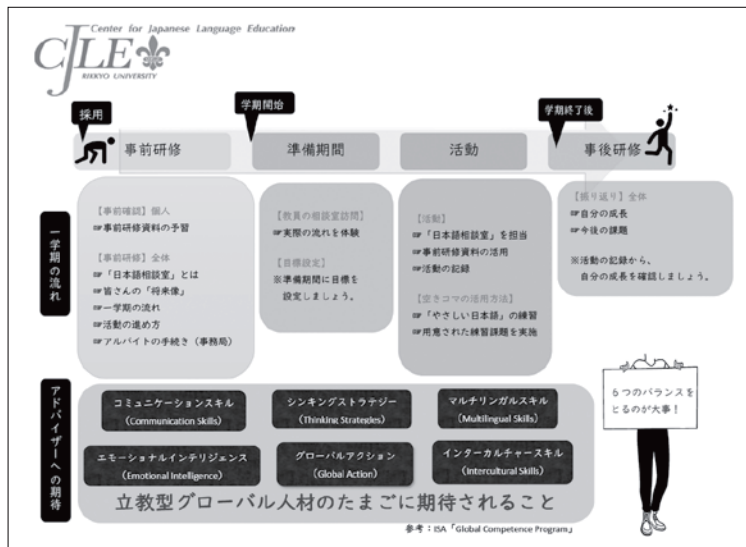


図2 日本語相談室学生アドバイザーの活動概要と1学期の流れ  
 (「日本語相談室学生アドバイザー 事前研修資料」より抜粋、一部修正)

### 3.1.2 「日本語相談室」の活動内容

二番目に扱ったのは、「日本語相談室」の理念や活動内容の理解を深めるための活動であり、前述の事前研修資料（図1）に沿って進めた。

藤田 恵、金庭久美子、小松満帆、任シエヒ、小林友美、数野恵理、鹿自葉子、丸山歌、池田伸子、FUJITA Megumi, KANENIWA Kumiko, KOMATSU Manho, YIM Jaehye, KOBAYASHI Tomomi, KAZUNO Eri, KANOME Yoko, MARUYAMA Chika, IKEDA Nobuko

まず、学生アドバイザーに、「日本語相談室」の相談者となる留学生が閲覧する「日本語相談室」の紹介サイト<sup>4)</sup>を見るように指示し、この場がどのようなところであるのかを確認させた。具体的には、持ち込まれる相談の内容、予約方法、相談時間、相談資料の送付方法などである。

次に、相談活動の際に注意しなければならないこととして、個人情報の保護への留意を取り上げた。学生アドバイザーが扱うことになる個人情報の例を挙げ、それらの取り扱いに注意すること、情報漏洩につながるような行いをしないことへの注意喚起を行った上で、「個人情報の保護に関する誓約書」への署名を求めた。同時に、「日本語相談室」で関わる留学生は、自身の個人的な交流で出会う留学生の友人とは異なる関係となることを意識させるようにした。

その次は、学生アドバイザーの担当時間に持ち込まれる相談内容への対応方法である。学生アドバイザーの担当時間に持ち込まれる相談内容の多くは、レポートの相談とプレゼンテーションの相談であることを伝え、日本語学習者が苦手とするポイントの例や、チェック項目を挙げながら、どのような点に注目して相談活動を行うかを説明した。前述のとおり、「日本語相談室」において、学生アドバイザーと相談者の関係は、共に考える者になることである。したがって、これらの対応は、留学生に教えるという立場から行うのではなく、お互いが提案や議論を行いながら進めることが重要となる。学生アドバイザーには、一方的な指導とならないようにするためにどのように相談活動を進めるべきであるか、自身の力でその方法を見つけることを促した。そして、相談者である留学生の背景は一樣ではないことから、その方法は一つではなく、相手に合わせた対応が必要となることも考えさせるようにした。

最後に取り上げたのは、学生アドバイザーの担当時間当日の流れについてである。「日本語相談室」では、Web上の管理システムを用いて、相談者情報、予約日時、相談内容などを管理している。学生アドバイザーには、この管理システムの閲覧方法、自身の担当時間に来る留学生と相談内容の確認方法などを説明した。当日の流れとしては、相談者とのアイスブレイキングの例、トラブル対応の方法、相談活動後の報告事項の手順を扱った。また、ここでも情報の取り扱いについての注意喚起を行った。

ここまで述べた活動は、前節で述べた6つの要素の経験と獲得に向けたものとなっており、学生アドバイザーに対して、実際の相談活動に入る前から、グローバル・コンピテンスの習得に向けての意識づけを行うようにした。

## 3.2 準備期間

「②準備期間」には、学生アドバイザーが自身の将来像をイメージし、その実現のための目標設定を行う活動と、「日本語相談室」の実際の流れや相談担当教員の持つさまざまなスキルの体験をするために、相談担当教員「日本語相談室」の見学を行った。

### 3.2.1 将来像のイメージづくりと目標設定

実際の相談活動に入る前に、学生アドバイザーには「日本語相談室」の相談活動をどのような



目標を持って取り組むのか、自身の将来像を言語化させる活動を行った。この活動は、小澤・丸山（2022）の配付資料「1.Theory of Change Logic Model」を参考に、統括教員が作成した活動シート（図3）を用いて行った。この活動シートは、パットン（2001）の発展的評価の思考が取り入れられている。小澤他（2016）によると、発展的評価の目的と意義は、「参加型で結果の活用を意識した実用主義的評価を、その設計の段階から意識して実施する」（小澤他、2016、21）ことであるという。本活動も「日本語相談室」の運営メンバーである学生アドバイザー参加型で行うことを重視したため、用意された問いに答えていくような従来型の評価ではなく、発展的評価の思考を取り入れることによって、学生アドバイザー自身が評価の設計段階から意識して自身の活動を評価できるようにした。

活動シートの構成は、下の4つの項目を順に書いていくように作成した。

- ①-a 自分の将来の姿（どのような人物になりたいか）
- ①-b 相談室担当終了後（学期終了時）の姿
- ② 今、感じている問題点・課題（心配なこと、不安なことなど）
- ③ 自分が何をすれば①の目標に到達するか

①-a では長期的な目標および将来像、①-b では短期的な目標および1学期終了時の姿、②では現在の課題を挙げ、③では①の目標に到達するために必要なことを考えるようになっている。学生アドバイザーには、Google スプレッドシートの形式で活動シートを配付し、1か月に1回この4つの項目について考えて書くように指示した。1回目の記入は、実際の相談活動に入る前の準備期間に行うことにし、この段階で自身が考えたことを自由に記述してもらった。

日本語相談室 学生アドバイザー 活動シート				
学生番号				
氏名				
①-aから③の順番で、自由に書いてみましょう。記入欄のサイズは、自由に調整してください。				
記入時期 ↓ ↓	②今、感じている問題点・課題 心配なこと、不安なこと など	③自分が何をすれば ①の目標に到達するか	①-b相談室担当終了後 (学期終了時)の姿	①-a自分の将来の姿 どのような人物になりたいか
4月 【記入日】				
5月 【記入日】				
6月 【記入日】				
7月 【記入日】				

図3 日本語相談室学生アドバイザー 活動シート（春学期）

### 3.2.2 相談担当教員「日本語相談室」の見学

学生アドバイザーが、実際に行われる相談活動と、相談担当教員の持つさまざまなスキルを体験するために、相談担当教員「日本語相談室」の見学を行った。通常の相談活動は、相談担当教員と相談者である留学生とで一対一で行われるものであるため、学生アドバイザーの見学は、相

談者の協力を得て行われた。

これまでの経験則から、学生アドバイザーがイメージしているよりも、相談担当教員は相談者に対して多方面から問いかけや提案をしていることが推測された。そのため、見学の際には、相談担当教員が何についてどのように相談者に問いかけをしているのか、一方的な意見の押し付けとならないようにどのように提案をしているのか、またそれらがどの程度の頻度で行われているのかを特に見てくるように伝えた。これらを踏まえた上で、相談担当教員「日本語相談室」の見学後に、どのような点に気づいたのか、ミニレポートの作成を課し、統括教員に提出させるようにした。

### 3.3 活動

「③活動」は、前節までの事前研修と準備期間を経て、学生アドバイザーが「日本語相談室」に実際に入って行う活動のことである。

#### 3.3.1 学生アドバイザー「日本語相談室」の相談活動

2022年度春学期は、授業期間と同じ14週、週に2回、1回50分、学生アドバイザー2名による「日本語相談室」を開室した。しかしながら、相談の予約が一度も入らず、学生アドバイザーには、担当時間に次節で述べる活動を進めてもらうようにした。開室期間中、留学生に向けて広報を行い、その際、学生アドバイザー「日本語相談室」の利点として、相談相手が同じ学生であることから留学生に近い存在であり、気楽な気持ちで来室してほしいこと、現在進行形で大学の課題を進める同級生や先輩であり、課題作成の手順や難しさを共有できる相手であることなどを伝え、相談担当教員「日本語相談室」との使い分けを広く伝えていったが、残念ながら学生アドバイザー「日本語相談室」の利用には結びつかなかった。

2022年秋学期は、春学期の相談者なしを踏まえ、その獲得を見込んで、授業期間に加えて試験期間にも開室することとし、学生アドバイザー2名による「日本語相談室」を16週開室することを計画している。2022年12月末の12週終了時点までに、15件の利用があった。相談内容の内訳を表1に示す。

表1 2022年度秋学期 学生アドバイザー「日本語相談室」の相談内容（12月末時点）

相談内容	9月 件数	10月 件数	11月 件数	12月 件数	合計 (内容別)
スピーチコンテスト関連	0	4	1	0	5
レポート作成（リアクションペーパーも含む）	0	2	0	4	6
発表準備（発表資料作成も含む）	0	2	0	1	3
その他	0	0	1	0	1
合計（月別）	0	8	2	5	15



10月に学生アドバイザー「日本語相談室」の初めての来室があり、この月はスピーチコンテスト関連、レポート作成、発表準備の相談活動が行われた。スピーチコンテスト関連の相談は、11月末に開催された「立教大学留学生による日本語スピーチコンテスト」の出場者によるもので、スピーチ原稿の作成とスピーチ練習が主な相談内容であった。レポート作成と発表準備は、2022年度秋学期に入学したNEXUSプログラムの学生（複数名）の利用であり、統括教員担当科目の履修者を中心に継続的に利用を促した結果、来室につながったものと思われる。

11月は前月に続いた来室が期待されたが、件数が減少してしまった。そのため、12月に向けて再度の広報を行った結果、12月の件数が微増した。利用者は、10月に来室したNEXUSプログラムの学生たちであり、学期末課題であるレポート課題がクラス内で発表されたことから、レポート作成の準備段階として、レポート課題の問いに関する意見交換や、レポート作成に向けた構成の検討といった相談活動が行われた。1月以降、残り4週においても、学期末課題に関連する相談活動の需要があることが予想されるため、継続的な来室と新規の相談者の利用が期待される。

学生アドバイザーには、相談活動の後、統括教員に対して、その日の相談活動の報告を義務付けている。この報告は、統括教員が勤務管理を行うための事務上の手続きという位置づけよりも、学生アドバイザーが相談者との相談活動によって、どのようなことを考え、何を学んだかを言語化させ、それを記録として残すことに重きを置いている。この記録は、「②準備期間」から毎月記述を続けている活動シートよりも高い頻度で繰り返し行われ、活動シートで挙げた課題の解決と将来像の実現に向けて、学生アドバイザーが「日本語相談室」の相談活動において、何を経験し獲得しているのか、その学びの変容が見られるものとなっている。この学生アドバイザーの学びの変容については、4節に後述することとする。

### 3.3.2 その他の活動

学生アドバイザーには、担当時間に来室の予約が入らなかった場合に備えて、相談者との相談活動とは別の観点からの学びが得られるような空き時間用の課題を用意し、その課題を進めた後に、相談活動後と同様の報告を行うように指示している。学生アドバイザー「日本語相談室」は、利用率の向上につながる広報活動を今後も継続的に行っていくが、現時点までに一番件数の多い10月の利用率が50%程度であるため、学生アドバイザーの現状としては、空き時間用の課題に取り組む時間が多い。

空き時間用の課題は、前述した立教型グローバル人材に期待される6つの要素の経験や獲得を段階的に行うものになっており、現在用意しているものは、「やさしい日本語」が必要なレベルから日本語上級レベルまでの日本語学習者に対するイメージづくりにつながるもの（「やさしい日本語」に関する理解のためのビデオ視聴）、レポート作成時のチェックポイントと相談者への伝え方などの気づきにつながるもの（レポートサンプルの添削とピア評価）、日本語母語話者として自身のレポートに対する自己内省と国語から日本語への意識化につながるもの（ライティング講座のビデオ視聴）、日本語学習者に必要なアカデミック・ジャパニーズとは何かを知るため

のもの（日本語学習者向け教材の学習）である。

学生アドバイザーの現状を踏まえると、「日本語相談室」の活動において、空き時間用の課題を行う時間が長く、これが学びの機会になっていることから、その機会を活かす課題となるよう、引き続き選定と作成を続けていきたい。

### 3.4 事後研修

「④事後研修」では、学生アドバイザーが行った「日本語相談室」の活動の振り返りを行った。現時点では、春学期の学期末に行ったのみであるため、相談者との相談活動についての振り返りを行うことはできなかったが、秋学期に行う事後研修では、相談者との相談活動の振り返りを取り入れる予定である。春学期に実施した事後研修では、毎回の担当時間に行った空き時間用の課題の後に提出した報告と、毎月記述した活動シートを統括教員と共に見直し、自身が挙げた将来像の実現に向けて、これまでどのような取り組みをし、どのような変化や成長があったのか、そして、その実現のための新たな課題の設定と今後の取り組みについて考え、発表する活動を行った。

春学期に担当した学生アドバイザー A と B の発表内容から内省の結果をみると、活動シートに挙げた目標が、学期開始時には漠然とした内容であったのに対し、学期が進むにつれて、その内容が具体化されていくことが分かった。資料 1 に、その一例を挙げる。

資料 1 学生アドバイザー A、B の活動シート（春学期）の記述内容（抜粋）

・学生アドバイザー A の短期的な目標（①-b 相談室担当終了後（学期終了時）の姿）

4月：相手の疑問や発言の意図に気がつける。

順序立てて、相手に分かりやすく話せる、説明ができる。[以下、省略]

6月：添削をする際に、学習者が間違いやすい点はどこか理解したうえで、どこを重点的に説明すべきか分かるようになる。[以下、省略]

・学生アドバイザー B の長期的な目標（①-a 自分の将来の姿）

4月：日本と海外の両方を行き来しながら仕事をして、日本とその国の架け橋となるような人

7月：日本と海外の両方を行き来しながら仕事をし、言葉が通じない中でもお互いの気持ちを汲み取って、コミュニケーションを円滑に進められる人

・学生アドバイザー B の短期的な目標（①-b 相談室担当終了後（学期終了時）の姿）

4月：コミュニケーションを取りながら、相手の気持ちを理解し、その人の不安や心配を和らげられるような人

7月：相手の気持ちを汲み取って、それを言語化することで、その人の不安や心配を和らげられるような人 [以下、省略]

資料1を見ると、学生アドバイザーAは、相談者の疑問と自身が行う説明内容に関して、学習者が間違いやすい点を重点的に行うことを目標として掲げている。学生アドバイザーBは、日本と海外の架け橋となる人物像は、お互いの気持ちを汲み取り、コミュニケーションを円滑に進められる人であること、また、相手の気持ちを理解する手段とは、相手の気持ちを汲み取り、それを言語化することであるという自身の答えを見つけている。この結果は、空き時間用の課題のみによって得られたものであるが、これに相談者との相談活動が加わることにより、さらなる変化と成長があることが期待される。

ここまで、2022年度の学生アドバイザー「日本語相談室」の取り組みを整理し、活動シートの記述内容の一例を挙げて、学生アドバイザーに生まれた変化の一端を述べた。次節では、学生アドバイザーが「日本語相談室」の相談活動によって、何を学んだのか、その学びの変容を述べる。

## 4. 2022年度「日本語相談室」学生アドバイザーの学びの変容

2022年度の秋学期は前述の通り、12月末時点で15件の利用があった。ここでは、秋学期担当の学生アドバイザーA（春学期より継続）と、学生アドバイザーC（秋学期後半から担当）の相談活動があった日の報告の記述を分析する。

### 4.1 学生アドバイザーAの活動記録

資料2は、学生アドバイザーAが実際にアドバイザーとして活動した際の記述の一部である。相談者は同一の学生である。

資料2 学生アドバイザーAの報告（秋学期）の記述内容（抜粋）

10月（1）

#### 【相談内容】

- ・レポート（ディスカッション記録用紙）作成支援

事前に送られた資料を、ワードで赤入れしたものを使いながら作成支援を行った。

事前に理解できなかった箇所は、その場で意味確認を行った。

#### 【コメント】

留学生にもっと構えられるかと思っていたので、想像していたよりもオープンな態度で接してくれて安心した。「相談室」だからと構えていたのは私のほうだったのかもしれない。教えてくれてありがとうではなく、たくさん考えてくれてありがとうといってくれたので、今日の目標だった「指導」ではなく「提案する」「いっしょに考える」は達成できたと思う。留学生の視点でディスカッション記録用紙を読みながら感じたのが、他の学生が書いた文字

の解読が難しいということ。自分のためのハンドライティングと相手のためのハンドライティングを考えることも「やさしい日本語」には必要だと感じた。

10月(2)

【相談内容】

- ・リアクションペーパーの日本語チェック
- ・読みもので分からなかった箇所についての質問対応(単語や概念、歴史的背景について)

【コメント】

日本語で文法的な理由を説明したあとに、他にも多くの使用例を挙げるようにしているのだが、今回は直前予約のため事前準備なしだったこともあり、すぐにいい例が浮かんで来なかった。もっと自分の日本語の引き出しを増やして、事前準備なしでもなるべく有意義なサポートを提供できるようになりたい。やさしい日本語スキルに関しては、春学期のころから心がけていたこともあり、難なく言い換えややさしい説明ができるようになってきたと感じる。相談室以外でも実感することが多く、引き続き日常生活でも意識していきたい。

資料2を見ると、相談者は10月(1)の際は事前に資料を送っており、学生アドバイザーAは相談内容に対し準備が可能であったことがわかる。そのため、文を修正する際に、複数の表現を準備していたようである。相談者からも「教えてくれてありがとうではなくて、たくさん考えてくれてありがとう」と言われたことを記録している。春学期の研修や見学では、表現を修正する際に答えは1つではなく複数あるかもしれないこと、答えは相談者とやりとりをしながら考えていくとよいことに学んできているが、それが行動として起こせた一例であろう。しかしながら、10月(2)は事前準備なしだったため、「すぐにいい例が浮かんで来なかった」と述べており、即時対応が難しかったようである。次なる目標として「もっと自分の日本語の引き出しを増やして」と掲げており、学生アドバイザーはこのような内省を続けながらも、徐々に学生アドバイザーとして成長していくのではないと思われる。

また、10月(1)の際には、「留学生の視点でディスカッション記録用紙を読みながら感じたのが、他の学生が書いた文字の解読が難しいということ」と述べており、留学生の視点で手書きの文章を読むことでその難しさに初めての気づきが見られた。これは日本人としては気づきにくい点であり、学生アドバイザーだからこそ得られる経験だと思われる。さらに、10月(2)では春学期から研修を続けてきた「やさしい日本語」に対するコメントとして、「難なく言い換えややさしい説明ができるようになってきた」と述べ、その成果が見られている。

## 4.2 学生アドバイザーCの活動記録

資料3は、相談者3名が同一課題を持ち込んだ際の学生アドバイザーCの活動記録の一部である。

## 資料3 学生アドバイザーCの報告（秋学期）の記述内容（抜粋）

12月

## 【相談内容】

- ・2000字程度のレポートに対するアドバイス

## 【コメント】

- ・相談者①に対するコメント

多文化共生についてのレポート内容の相談を受けながら、多文化共生の実現についてこちらから相談したいぐらい勉強になりました。

- ・相談者②に対するコメント

持ち込まれた意見に対する反応も大事ですが、テーマについて自分なりに意見を持ち合わせていることも、内容を深掘りするために重要なポイントだと気づかされました。

- ・相談者③に対するコメント

レポートの内容についてざっくばらんに議論をすることで、（私を含め）互いの気づきにつながっているような気がします。

相談者の3名は同じレポート課題が課されており、レポート作成にあたりこの段階ではブレインストーミングとして「日本語相談室」を利用している。記述の内容から、どの相談者ともたたくさんのやり取りが行われたことが予想される。学生アドバイザーはこの3名の相談内容で、一番目に対応した相談者には「こちらから相談したいぐらい勉強になりました」のように単に内容に関心を寄せているだけだが、二番目の相談者に対しては「自分なりに意見を持ち合わせていることも、内容を深掘りするための重要なポイントだ」と述べており、日本語に対する修正だけでなく自らの視野の広がり的重要性を痛感している。さらに、三番目の相談者に対しては「ざっくばらんに議論をすることで（私を含め）互いの気づきにつながっている」と述べている。二番目の相談者の際には自分なりの意見を持っていないという反省があったが、三番目の相談者から同一内容の相談を受けたこともあり、意見を持って話し合いに加わり、「互いの気づき」があることを指摘しており、自ら変容しようとしているように思われる。

資料2、資料3の記述から、学生アドバイザーAもCもそれぞれの活動の中で、新たな気づきがあり、それを次回につなげようとしていると言える。学部生の相談室の利用はまだまだ少ないが、このような活動を重ねることによって、学生アドバイザーの成長が期待される。

## 5. 立教型「日本語相談室」の展望

ここで、「3.1.1 立教型グローバル人材に期待されること」で述べた目標に照らして、資料2、



及び資料3の活動内容から学生アドバイザーの成長について振り返ってみたい。

## 5.1 立教型グローバル人材に期待されるスキルと学生アドバイザーの活動

表2は、期待されるスキルの有無を見た結果である。資料2は学生アドバイザーA、資料3は学生アドバイザーCのものである。少ない活動の中にも期待されるスキルに相当する記述が見られた。

表2 立教型グローバル人材に期待されるスキルと学生アドバイザーの活動

期待されるスキル	資料2(A)、資料3(C)の活動記録
(1) コミュニケーションスキル (Communication Skills)：多様な背景を持つ相手に対して、効果的にコミュニケーションを行うことができる能力を身につける。	資料2より ・「指導」ではなく「提案する」「いっしょに考える」は達成できた。 ・もっと自分の日本語の引き出しを増やして、事前準備なしでもなるべく有意義なサポートを提供できるようになりたい。
(2) マルチリンガルスキル (Multilingual Skills)：多様な言語背景を持つ相手へのコミュニケーション手段として「やさしい日本語」などを身につけ、その役割の理解を深める。	資料2より ・やさしい日本語スキルに関しては、春学期のころから心がけていたこともあり、難なく言い換えややさしい説明ができるようになってきたと感じる。
(3) エモーションナルインテリジェンス (Emotional Intelligence)：「日本語相談室」で複数の留学生と関わることにより、相手への共感、さまざまな場面への適応力を身につけ、同時に自己認識と自己管理を行う。また、これらのことを活動のモチベーションにつなげる。	資料3より ・自分なりに意見を持ち合わせていることも、内容を深掘りするために重要なポイントだ。
(4) シンキングストラテジー (Thinking Strategies)：多文化社会、グローバル社会に存在する自身とは異なる思考方式を知る。	資料3より ・多文化共生の実現についてこちらから相談したいぐらい勉強になりました。
(5) インターカルチャースキル (Intercultural Skills)：自身とは異なる文化的な価値観を持つ相手が存在することを知り、そのような相手に対して、理解と配慮ができる感性を身につける。そして、自身が不慣れな環境に置かれた場合に生き抜く能力を身につける。	資料3より ・ざっくばらんに議論をすることで、(私を含め)互いの気づきにつながっている。
(6) グローバルアクション (Global Action)：「日本語相談室」において多文化を経験し、その理解を深める場として活用する。	資料2より ・留学生の視点でディスカッション記録用紙を読みながら感じたのが、他の学生が書いた文字の解釈が難しいということ。

## 5.2 次年度の「日本語相談室」に向けて

表2のうち、「日本語相談室」でまず確実に身につけてほしいのは、「(1) コミュニケーションスキル」であろう。日本語に関する相談に適切に対応するには、資料2にあるように「自分の日本語の引き出しを増やす」ことが必要であると思われる。そのため、研修資料として、次年度



は「日本語の引き出し」を増やすための練習シートを準備できるとよいと思われる。例えば、違和感のある文（主語と述語が合わない文、連語の組み合わせが不適切な文、等）を示し、どこをどう指摘したらよいかを練習するとよいと思われる。

次に、「(3) エモーショナルインテリジェンス」として、資料3の記述にもあるように「自分なりに意見を持ち合わせている」ことはグローバル人材を育成するために大切なことだと思われる。したがって、次年度の研修の際には意見を持つことを意識化させることが必要ではないかと考える。もちろん意見の押し付けではなく、求められた際に自分の意見がはっきり言えることが重要である。

さらに「(6) グローバルアクション」において、資料2では手書きを読むことの難しさが指摘されていたが、通常の日本での生活では気づかないことである。「日本語相談室」は、小さく短時間でありながらも通常の日本社会ではない空間であり、そのようなことが経験できる場であることを改めて感じた。次年度の研修の際には「日本語相談室」が小さい外国であることを強調して、多文化を経験し、その理解を深める場として活用してほしいことを伝えたい。

## 6. おわりに

本稿では、2022年度学生アドバイザー「日本語相談室」の取り組みについて、事前研修の内容、準備期間に行ったこと、学生アドバイザーの相談活動内容、事後研修の内容、学生アドバイザーの学びの変容、今後の展望について述べた。

2022年度は初年度であり、まだまだ軌道に乗ったとは言えず、改善すべき点は多い。しかしながら、学生アドバイザーが期待通りの活動をすることによって、今後の育てるべきアドバイザー像が見えてきたように思われる。留学生と日本語を母語とする学生がともに多文化共生理解を深める場を目指すと同時に、多文化共生社会で活躍できるグローバル人材を育てることを目標として、今後も「日本語相談室」を発展させていきたい。

### 注

- 1) 早稲田大学 日本語教育研究センター「わせだ日本語サポート」  
<https://www.waseda.jp/inst/cjl/students/support/waseda/>
- 2) 神戸大学 グローバル教育センター「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」  
<https://g-navi.jp/project/03/jawl22l/index.html>
- 3) お茶の水女子大学 国際教育センター「留学生日本語学習支援・交流室」  
<https://www.cf.ocha.ac.jp/gec-in/j/menu/life/supportroom.html>
- 4) 立教大学 日本語教育センター「日本語相談室」  
<https://cjle.rikkyo.ac.jp/supportdesk/default.aspx>
- 5) OECD 「PISA 2018 Global Competence Framework」

<https://www.oecd.org/pisa/Handbook-PISA-2018-Global-Competence.pdf>

6) ISA「Global Competence Program」

<https://www.isa.co.jp/wp-content/uploads/2022/12/Global-Competence-Program-Brochure.pdf>

参考文献

- 小澤伊久美・丸山千歌・池田伸子（2016）「日本語教育プログラム運営における開発型評価活用の意義と可能性」『日本語教育実践研究』3号、20-31.
- 小澤伊久美・丸山千歌（2022）「発展的評価を日本語教育で実践する」Zoomによるオンライン開催ワークショップ、2022年3月3日、配付資料.
- 木下直子・トンプソン美恵子・毛利貴美・尹智鉉（2017）「日本語学習アドバイザー育成をめざしたコースの可能性と課題——履修者と現職アドバイザーの比較を通して——」『日本語教育方法研究会誌』23巻2号、30-31.
- 寅丸真澄・吉田好美（2021）「「わせた日本語サポート」の挑戦——全留学生に開かれた日本語自律学習支援を目指して——」『早稲田日本語教育実践研究』第9号、3-10.
- トンプソン美恵子・木下直子・尹智鉉・寅丸真澄・毛利貴美（2019）「日本語教育副専攻科目における日本語学習アドバイザー育成：受講生の認識に見る可能性と課題」『日本語教育』174号、16-30.
- パットン・マイケル・クイン（2001）『実用重視の事業評価入門』（大森弥・山本泰・長尾真文 編）清水弘文堂書房.
- 森田耕平（2021）「オンラインでの日本語アカデミックライティング支援：運営・指導の方法とその成果・課題」『神戸大学留学生教育研究』第5号、23-43.
- 文部科学省（2011）「グローバル人材育成推進会議 中間まとめ」[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/09/1309212\\_07\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/46/siryo/_icsFiles/afieldfile/2011/08/09/1309212_07_1.pdf)（2022年12月30日アクセス）
- 立教大学（2014）「立教大学 国際化戦略 Rikkyo Global 24」<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/rg24/>（2022年12月30日アクセス）